
SEED

ズタ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

SEED

【Nコード】

N1071W

【作者名】

ズタ

【あらすじ】

特殊能力「SEED」を所有する主人公「滝川 薫」は表向きは高校生、裏向きは「黒き暗殺者」ブラックカーネイジとして活動している。何が正義で何が悪か、何が正しく何が間違いかを葛藤しながら自分の正義を貫きながら能力者達や悪党達と戦うお話。

プロローグ「黒き暗殺者」（前書き）

自分はただの学生なので小説を書くのは初めてですが頑張って書きたいと思います。この作品は一応色んな視点で見る作品です。その内の一人のお話です。自分のペースで書くので長く待たせたりしてしまいます、その辺は温かい目で見てください。少しずつ投稿するつもりです。投稿間隔はランダムです。

プロローグ「黒き暗殺者」

プロローグ

ブラックカーネイジ

「黒き暗殺者」

悪。それは弱者を力で抑え付ける者のこと。

悪。この世から消えなき者。

だから、裁くのだ、彼らを。弱者を痛めつけ、弱者を騙す悪を。彼らを裁くことに何の躊躇もしない。同じ人間でも中身が違うのだから、悪はそう簡単に変わらない。だから裁きを与える、殺しはしない。そして気付くはずだ、それは悪いことであると、いつかきつと気付いてくれるはずだ、あの憎い奴らも。自分たちが犯した罪に気付くはずだ。だから裁く。悪はこの世に存在してはいけない。死の恐怖と言う鎖を作るのだ。そうすればいつかきつと…、悪意をもつて悪事をしないはずだ、罪を背負おうとするはずだ、そういつか、だから俺は悪を裁く偽善者になるのだ。

プロローグ「黒き暗殺者」(後書き)

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやおかしいところがあったら指摘してくださいとありますがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。それでは次回をお楽しみください

「いてて、あ、ごめん！大丈夫！？」

急いで起き上がって衝突した人に手を差し伸べる。

「すみません、考え事してたもんで…」

「いえ、こちらこそすみません」

そこで初めて目が合った。金髪の可愛い女の子だった。

可愛い子だなあ…。ってそんなこと考えてる場合か！

「あの、大丈夫ですか？」

少しぎこちなく聞いてみる。

「はい、なんともないです…」

女の子も何故かぎこちなかった。何故だろう？ふと街の時計を見ると30分前だった。頭を切り換えて落ちた荷物を慌てて拾った。

「すみません！時間が無いんで俺はこれで！」

女の子がなんか言っていた気がするが適当に頷いてその場を去っ

た。学校に着くまでずっとぶつかった女の子のことを考えていた…。

4月7日？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。それでは次回をお楽しみください

4月7日？（前書き）

今回新しく出るメインキャラ紹介

リンダ・リンス 15歳

今作のメインヒロイン。明るくて積極的な性格。薫に一目惚する。

SEED「強制磁化」
マグネ

天野 秋 15歳
アマ アキ

リンダの親友で良き相談相手。友達には優しいが他人にちよつときつい性格。

SEED「絶対防盾」
イージス

祭木 光 17歳
マツリキ ヒカル

しっかりとした性格で頼れる姉のような存在。その反面頑固などこがあるのが玉に瑕。

SEED「光凝縮」
レイ

天宮 御門 16歳
アマミヤ ミカド

いつも読書していて自分から行動しない。感情を表に出すことが無く落ち着いた性格。

SEED「門」
ゲート

4月7日？

「行っちゃった……」

その言葉を発し終わった時には薫の姿はもう少女の視界には居なかった。人混みで見えなくなったかもう見えないとこまで行ってしまったかのどちらかだろう。ぶつかった拍子に落ちた薫の携帯を見つめながら少女は自分の気持ちを整理していた。

何だろっこの感じ…、ドキドキする。一目惚れ…？確かに格好良かったけど…、何か違うんだよね。格好いいからとは違うんだよね。何だろっ…変な感じ。

自分の気持に戸惑いながら少女…リンダ・リンスは待ち合わせしているお気に入りのお茶に向かった。

「本当に大つきいねえ…」

私は目の前にある巨大なパフェを見ながらそう言った。

「流石に予想外の大きさだわ…。念のため四人で来て良かったわね…。」

誘った本人の光も青ざめている。その反面光の隣のミカは平然な顔で「そお…？」って言うてる。自信でもあるのかと思ったけどミカのキャラでは良く解らない。

「ねえミカ、もう少し驚いたりしたら？」

「…別に」

「女の子ならこう明るくなくちゃ」

大げさに可愛い仕草をしたが見事にスルーされた。何か言ってくれないと逆に恥ずかしいよ…。

「そんな事より食べよ？」

隣のアキが私を宥めながら切り出した。

「そうね、折角の休日が無駄になったら元も子もないしね。ちゃっちやと食べましょ」

数十分後にはほとんどパフェが無くなっていた。

「意外と行けたわね」

「そうだね」

「ミカも意外と食べたし。好きなの？」

「スイーツは好き…。」

わんやわんや喋りながら残り少ないパフェをみんなで少しずつ食べ見事に完食した。

気が付くと外には始業式を終えた学生達が歩いてた。今朝ぶつかった学生の事を思い出し携帯を取り出した。そういえば落とした携帯もちつばなしだなあ…。

「あれ？リンダってそんな携帯もってたっけ？」

「ん？ああ、これ？今朝ぶつかった学生の落とし物」

「へえ、ちょうど帰りの時間だし返しに行ったら？」

「でも学校先が分からないし…。」

「落とした場所にまた来るだろうし、そこで待ってたら？顔は覚えてるんでしょ？」

「まあ、一応は…。」

今朝の事を思い出していたらまたドキドキしてきた。…まさか本当に？

「どうしたのリンダ？」

「えっ？ううん何でも無い！じゃあ私少し行ってくるね！」

少しでも早くここを出たかったからちよつと急いで出る。

「お会計お願いね！」

手を振りながら私は喫茶店をさった。ドキドキする気持ちを抑えながら…。

4月7日？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやおかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

4月7日？

現時刻1時半過ぎ。

リンダは薫の携帯を拾った時計の前に立っていた。

私は空を見ながらぶつかった子の事を考えていた。

本当に好きになってるのかな？本当に一目惚れしてるのかな……？
どうなんだろう……？結局は分からない。………また出会えば分かるよね。きつと……。そんなことを考えてたら声をかけられた。
でも目的の人では無かった。

「君一人？だつたら俺らと遊ばね？」

面倒なのに捕まっちゃったな……。

「私、人を待ってるんです。」

「いいじゃんかよ、そんなやつほつといてさ」

「私に構わないでください。」

「そんなつれない事言うなよ。そんなことより遊ぼうぜ」
いきなり腕を掴んできた。

「離してください。」

「今のうちに言う事聞かないと痛い目みるよ嬢ちゃん。」

面倒くさいなあ。能力使ってノシちゃうか？でもここじゃ人目を引くし。どうしよう。誰かが助けてくれるのが一番なんだけどね。

……そんな勇氣ある人居るわけ無いよ。

そしたら何故か今朝ぶつかった子が思い浮かんだ。……まさか、そんな都合良く来てくれるわけ……。

「おい、やめろよ。嫌がつてるだろ。」

……え？

「何だよてめえ、ヒーロー気取りか？あ？」

「……ヒーロー……か、ある意味あつてるな。」

もう一度良く見る。………やっぱり、今朝ぶつかったあの子だ。

「はあ？」

「そのままの意味だよ。それに、その子に用があるし、知り合いなんだ。」

何で来てくれたんだろう。いや、携帯を探しに来てたまた来たのかな？

そんなことを思っていたら不良が私の腕から手を離し臨戦態勢になっっていた。

「ああ、成る程。てめえが待ち人か。ちょうど良いてめえが居なくなりや遊べるって訳だ。」

…何言ってるんだか。遊ぶなんて一言も言っていないのに…。きっと自己中な馬鹿なんだろうな…。

「待ち人？」

「てめえのことだろうがよ。とぼけてんじゃねえよ！」

不良がいきなり殴りかかってきた。が薫はそれを簡単に避けて、溝に一発ぶち込んだ。

「おげえっ!!！」

「正当防衛成立…！」

薫がそう呟き終わると不良は倒れた。

「てめえ！」

もう一人の不良がさらに殴りかかってきた。薫はそれを難なく避け…

「先に殴ってきたのはそっちだろうが、よ！」

見事にクロスカウンターが不良に決まった。

「ぶげっ」

もう一人の不良も力なく倒れる。勝てないと悟ったのか、残った不良が倒れた不良達を抱え、

「くそっ！覚えてろ！」なんて捨て台詞を言いながら逃げていった。わあ、簡単に倒しちゃったよ。にしても動きが良い、良すぎる位に…。

訓練されてるのか身体関係の能力者かな…？

リンドは少し考える。最初に殴りかかれた時、不意打ちに近いのに簡単に避けた。さらに綺麗に溝に一発…。何かの訓練でも受け

てるのだろうか？それとも…

「ふう。君、大丈夫？今朝ぶつかった子だよな？」

「あ、はい。そうです。」

不意に声をかけられたが冷静に対応し、すぐ思考を変える。

「やっぱり。あのさ、今朝ぶつかった時そこら辺に黒い携帯落ちてなかった？」

「これですか？」

リンダはそう言うとポッケから拾った携帯を取り出した。

「あ、それぞれ。ありがとう。拾っていてくれたんだね。」

「あの時急いでたみたいだから渡せなくて持ってたんです。」

「あ、あの時か。あの時登校初日なのに寝坊して遅刻しかけてたんで急いでたんだよね。ごめん。」

彼はアハハと苦笑しながら頬をポリポリしてた。話しているとドキドキしてきた。

「……あの返してくれるかな？」

「え？」

私はまだ彼の携帯を握っていた。それに気が付くとすぐに彼に渡した。

「あつ、ごめんなさい！」

「んっ、ありがとう。それじゃ」

彼は目的の物を受け取ると帰ろうとした。……何だろう。…何でだろう。…何で、まだ居たいと思うんだろう。

「あ、あの！」

少し大きな声で呼び止める。ちゃんと聞こえたのかこっちを振り向いてくれた。

「さっきのお礼をしたいから、一緒にレストラン行きませんか？」

自分で言ったことが恥ずかしい。でも本心でもある。まだ彼と一緒に居たい。何故かそう思ったから。

少し考えてるのか、返事が少し遅かった。

「……うん。良いよ。」

その時、彼の顔を見て私の気持ちは確信になった。……私は、彼が好きだ。名前も知らない彼に、一目惚れしていたのだ。

4月7日？（後書き）

少し遅くなってすみません。

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

4月7日？（前書き）

夏休みが明けたので土日のどっちかに更新します。未永く暖かい目で見守ってください。
メインキャラ以外はキャラ紹介しません。

4月7日？

俺、滝川 薫は現在、携帯を拾ってくれた金髪美少女とレストラ
ンに居ます。……………なんでこうなった……………。約1時間ほど前…

「なあ薫。もう携帯買ったんだろ？アドレス交換しようぜ」
「買ったけど…、 を付けるな を」

友達にツツコミながらポケットに入れてある携帯を探った。しか
し目的の物は出なかった。なら反対だなと思えば反対側のポケを調
べても見つからず、なら後ろポケ、バック、机とあらゆるところを
探したが見つからなかった。

「どこいった…」

「買った次の日になくすとかお前すげえな…。家に忘れたとかじゃ
ないのか？」

友達に飽きられながら記憶を遡った。朝出る時には持ってたし、

……………あ。

「あの時かあ……………」

「あの時って？」

「実はさ、今朝急いでて女の子とぶつかって荷物ぶちまけたんだよ。
その時に落ちたのかも知れない。」

「今朝急いでて女の子にぶつかるとかどこのマンガの展開だよ。」

「仰る通りでございます。」

友達に笑われながら自分に呆れてた。確か時計の前だったよな？
ぶつかった子が持つてるかな？何か言ってたし（急いでたからスル
ーしたけど）、携帯のことだったのかな…。もしそうだったら持つ
てるかも知れないな。ダメ元で行ってみるか…。

「俺携帯探しに行ってくる。」

「アテでもあんなの？」

「まだ笑うか。まあ一応は…。」

半信半疑だが。そういえばぶつかつた子すごく可愛かつたな。……何か思い出したらドキドキしてきたな……。俺はその時、男の生理現象だと思つていた。その時は。

そして不良に絡まれてるこの子を助け現在に至ると……。うわゝ身体が熱くなつてきた。さつきまで良く平静で居られたな俺。ある意味不良どものおかげだけど……。

「あの……。」

「ん？」

「さつきは助けに来てくれてありがとうございます。私、リンダ・リンスつて言います。」

「ああ。そんな大層なことをやってないよ。」

不良に絡まれたりしてる奴は良く助けてるから助けてなれてるし……。アレで。にしても金髪美少女と一緒にレストランに居るつてだけでドキドキするぜ。恥ずかしいもあるような照れもあるような嬉しいもあるような。感情がこんがらがっていた。

「あの、あなたのお名前は？」

「俺？俺は滝川 薫。今年から高校生だよ。言わなくても分かるか？俺は苦笑しながら顔が赤くならないように踏ん張つてた。変な風には思わられてく無いしな。あゝドキドキする。……もしかして恋？そう考えたらすごくドキドキしてきた。うまく言葉では表せないが、すつごくドキドキしてきた。」

「どうしたんですか？」

「いや何でも無い。」

ちよつとわたわたする。少し考えたら意識しちまった。目合わせらんねえ……。

「あの、お礼がしたいんで何か食べませんか？おごりますから。」

「いや良いよ。申し訳ないし。」

「お礼をしたいんです！折角助けて貰つたんだし……。」

リンダが顔を赤らめさせながら目を反らし、人差し指と人差し指

でツンツンし始めた。男の子と行くの初めてなのかな？俺も女の子と行くのは初めてだけどさ……。

「じゃ、じゃあ。お言葉に甘えさせて貰います。」

「…はい！」

リンダがぱーっと笑顔になった。何が嬉しいんだろう？女の子はわからんな〜と思いつつもその笑顔を見れて満足している自分が居た。

俺は出来るだけ安めの物を頼んだ。女の子も安くて量が少ないのを選んだ。

最初は二人とも空気がぎこちなかったが、話すにつれ空気が柔らなくなっていく、二人とも普段の口調になった。少なくとも俺は。

色んな事を話しながら食事をした。話に夢中になってるうちに外はもう夕日が沈みかけ、夕方になっていた。

「もうこんな時間か……」

携帯を見ると五時を過ぎていた。

「そろそろお別れかな……」

リンダもどうやら帰る時間みたいだ。少々名残惜しいが仕方が無いか。

「じゃあ、そろそろ切り上げよっか。」

そう言っただけ俺を席を立った。

「あ、待って！」

「ん？何？」

「折角出会えたんだしメアド交換しない？」

「ああ良いけど。」

そして俺はリンダとメアドを交換してお別れした。まさか電話帳に最初に載るのが（姉ちゃんを抜いて）金髪の美少女とは。そう考えると少しにやけてしまった。遅刻しかけたけど良い一日だったな。

「さて、家に帰るか……」

リンダの事を少し考えながら俺は帰路を目指した。

4月7日？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

書いていると自然と文字数が増える物ですね。アハハ

4月7日？（前書き）

前の話はちょっと暴走してしまいました。修正後を読んだ方は分からないと思いますが。逆に修正前を読んだ人はこれを読む前に「4月7日 運命？」（修正前は4月7日 結ばれる思い）」を読んでもください。結構変わっているので読まずに読むとごっちゃになります。

4月7日？

「ふんふんふん」

「……珍しいねリンダが鼻歌を歌うなんて。良いことでもあった？」
「うん！あの後良いことがあって」

リンダは自分に酔っていた。それもそのはず、好きな人とレストランで一緒に食事して色んな話を話し、メアドも交換したのだ。恋する乙女にとってこれほど嬉しいことは無いだろう。

「何があつたの？」

「うんとね。…あ、ちょっと待って」

「何？」

「ドアとか開いてないよね？」

リンダはそそくさと動き、ドアや窓を確認しては開いてるところを閉めた。リンダがこういう行動をする時はルームメイトであり親友であるアキに話す事があるか相談する時だ。リンダは全部の窓やドアをチェックするとアキの隣に座って話し始めた。

「それで？何があつたの？」

「うん あかね？携帯を拾った時計のここに行つて携帯の持ち主を待つてたんだよ。したらね、不良に絡まれちゃって」

「ええっ！？大丈夫なの？」

「うん。したらね、偶然携帯の持ち主が来て助けくれたの！助けに来てくれたりしないかな？って思ったら本当に来たんだよ？すごい！？」

「へへ、そんな偶然もあるんだね。良かったじゃん。それで？」

「そしたらあつという間に不良達を倒したんだよ！殴りかかってきたのは一人だけ…」

「なんで殴りかかってきたの？」

「そいつ馬鹿でね。その持ち主を倒したら私と遊べると思つてぶちのめおすとしたみたい。」

「本当にとんだ馬鹿だね。まさに大馬鹿。ところで持ち主の名前は分かるの？」

「あ、うん。滝川 薫って言ってた。私は薫って呼んでるけど。」
「へへ滝川君ね。あ、続きをどうぞ。」

「うん！それでね、お礼にねレストランに誘ったんだよ。そこで食事しながら色んな話を話したの。」

「今日のスペシャルパフェ食べたよね？よく食べれたね……。」

「少ししか食べてないから大丈夫だよ！」

「お肉つかないと良いね。それで？その後の展開は？」

「メアド交換してさよならして現在に至ります。すごく楽しかった！好きな人とお話ししたり一緒に食事したりするのってすごく楽しくて幸せだった……。一緒に居るだけでドキドキするものなんだね……。でもお別れしたら少し寂しくて……。切なかった。でも思い出すとまた幸せな気分になれて……。ポワワーン」

「あはは……。まだ恋したこと無いから良く分からないけど良かったね。幸せになれて。私たちの目標に近づいてるじゃん。」

「うん、そうなるけどちょっと違う気がするな……。」

「何で？」

「だって「みんなが幸せになる」が目標でしょ？私だけが近づいてもちよつと違う気がするな。」

「一理あるけど、結局は個人個人が幸せにならなきゃいけないんだしさ。それにみんな同時に幸せになるなんて難しいでしょ？だから一応目標には近づいたよ。」

「うん、そうだね……。」

「がんばってねリンダ。応援してるよ。リンダの恋愛。」

「……うん。ありがとう……。」

「それに」

「それに？」

「リンダとかと話してるだけでも幸せだよ私は。だからみんなも少しは幸せのはずだよ、あの頃」よりは……。ね。」

「……うん！」

「わっ。抱きつかない！」

「だって嬉しいんだもん」

今思えば少しは人並みの幸せは掴んでるよね、私たち。「あの頃」
よりは……きっと……。

4月7日？（後書き）

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

恋愛感情のところは自分の体験談をもとにしています。きっとみんな同じ気持ちだよ、恋してるなら。

4月7日？（前書き）

？仮のちゃんとしたやつです

4月7日？

夕方の六時を切った。もう外は夕日が沈み暗くなっていた。

「頃合いだな……。」

薫は外が暗いことを確認し、棚の暗い隅っところあるはずの無い黒い服とフード付きのマント、手袋を取り、着替えた。

「さあて、今日も張り切って悪党退治しますかね……。」

薫はそう言つと窓から飛び降りた。

しかし、薫の姿は着地する前に消えていた。

近くでは不良達が話してた。酒を飲みながら話す奴も居ればタバコを吸いながら話す奴も居る。その話の内容はブラックカーネイジの事だった。

「今日もやつてたぜアイツのこと」

「またかよ。ヒーロー気取りかよ」

「でも結構やられてるのも本当だぜ？俺の友達の家も全員しめられたつて」

「でも人を襲わなければ襲われないつて噂だぜ？」

「ああ、その通りだぜ？」

不良達が一斉に声のした方向に振り向く。だがそこには人の姿は無く、聞こえるのは声だけだった。

「お前達が誰かを襲わなければ俺は何もしないぜ？あん時だつてカツアゲ何かしてるから止めたら襲ってきたから返り討ちにしたただけだぜ？」

尚も誰も居ないところから声が聞こえる。不良達は見えない恐怖に襲われてた。一人の不良は近くの鉄の棒を手に取っていた。

「攻撃しないならこっちは何もしないぜ？だからその物騒な物は捨てな」

そう言つと不良の腕を誰かが握った。

「ひっ！」

不良の恐怖のあまりに鉄の棒を離してしまった。そして声はその不良の耳元で囁かれた。

「ナニモスルナヨ…？」

それはとても冷たい声だった。冷たく殺意のこもった声だった。不良達はその一言で凍り付いた。

「何もしなければ何もしない。じゃあな」

そう言う声は消え、静寂と恐怖に凍り付いた不良達だけが残された。

「我ながら良い演技だったな…」

歩きながら薫はふとつぶやいた。薫は極力手を上げず恐怖によって不良達を縛っていた。能力を巧みに使い、言葉と雰囲気、噂を使い不良達を恐怖で黙らせていた。今日はこれで3組目だった。

「今日は帰るかな。」

薫は時計を確かめる。

時間は10時を過ぎていた。

薫を家に向かった。暗闇と一緒にやりながら。

4月12日? (前書き)

1日1日であつては色々問題が生じるので数日飛ばしたりします

4月12日？

俺は今友達と近くのレストランに来てテスト勉強をしていた。前にリンダと食事をした場所だ。

学力調査テストで午前中に学校が終わったから飯を食べながらテスト勉強してるってわけ。

「なあなあ薫。ここはどうやって解くんだ？」

友人の一人が数学の質問をしてきた。自慢では無いが俺はそれなりに頭が良いのだ。

「ん？ああここね。これはまずaをこうやって求めてから代入して……」

「ああ解った解った！これをこうするのね」

「そうそう」

友人が理解したところで俺は自分の勉強に戻った。

ある程度勉強が終わって俺はジュースを飲みながら外を眺めていた。周りの友人は（もつとも俺含めて3人だけ）黙々と勉強をしていた。ノートを書く音とジュースを飲む音だけが俺らの席では流れていた。

ジュースが飲み終わってしまい暇になった。

友人達の方をチラリと見る。特に解らない問題が無いみたいだから俺は帰ることにした。

「俺帰るわ」

「解った」

友人の一人がそう言うのと席を退いてくれた。

俺はお礼を言いながら席を後にした。が、すぐに戻ってきた。

「どうしたの？」

「いや何でも」とか言いながら汗をダラダラ流している俺。

戻ってきた理由は一つ。後ろの席にリンダが居たから。

何故ここにリンドが居る…！

ここで帰ったらリンドに行くわし、友達に金髪美少女と知り合いたとばれたらこの後何されるか解らない…！運が悪ければ殺される…！

「ん？」

「どうしたのリンド？」

「今どっかで見たことのあるような人が一瞬視界に入ったような…？」

後ろの席から会話が聞こえる。確実にリンドだ。

頼む…！来ないでくれ！会いたいの俺もやまやまなんだが友達にばれるのは避けたい！でも何で会いたいんだろ？まあ気に入った奴に会いたいと思うのは普通だよな。そんなことを考えながら俺は席の隅っこに行っただ。

「お前何してんの？」

「いや俺のことは気にしないで良いからうん。気にしないで気にしないで」

「お前どうかしたのか？」

「ある意味あつてるかな？アハハ」

「まるでここでは会いたくない人に会ったみたいなきさだな」
鋭いなこいつ。

「さあ？」

「怪しいな」

「何のことやらサツパリ。そんなことより勉強しなさい！」

「余計に怪しいな」

「明日テストなんだから勉強しろ！」

「へいへい」

無理矢理言いくるめた…

「やっぱり薰だ！ヤッホ」

が終了のお知らせが来たようだ。

「よ、よう…リンド」

リンドは席を乗り越えて話しかけていた。

「こんなところで会うなんて奇遇だね」

「あ、ああ」

今この状況では会いたくなかったよリンドさん。

「何してるの？」

「友達と一緒にテスト勉強……」

恐る恐る友人達の方を見ると

「あ、俺用事思い出したから帰るわ」

「あ、俺も」

空気を読んで帰ってくれるようだ。

自分で頼んだ物の値段分の金額を置くと帰って行く友達達。

俺の隣を横切る時に軽く睨まれた。

ああ、明日俺は死ぬんですね

「どうしたの薰。この世の終わりみたいな顔して」

そんなことも知らずに話しかけてくるリンド。

今はこの時間を味わうとしよう。明日に備えて

4月12日? (後書き)

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

4月12日？

「へ〜、そうなんだ」

あれから数分経ち、今はリンダと二人で席に座ってる。あの後リンダは一緒に居た茶髪の子と分かれてこっちの席に来た。代金は茶髪の子が払ってくれるらしい。

「意外と頭良いんだね薫は」

因みに今は何の勉強をしてたか、何が得意かを話している。

「意外とは失礼な…」

「あはは、ごめんごめん。良くも無く悪くも無いイメージだったからさ」

「それなりに自信はあるんだぞ！中学校だって結構中の上ぐらいキープしてたんだから」

「へ〜」

リンダは簡単な会話をするだけで嬉しそうな顔をする、勿論俺も嬉しいし楽しい。そういえばリンダもテスト期間だから居るのかな？制服着てないけど

「なあ」

「何？」

「リンダもテスト期間で学校早く終わったの？」

「ああ、私学校行ってないんだ」

「はい？」

「学校行ってないの」

もしかして試験に落ちたのかな？だったら追求しない方が良いよね。

「あ、ああそうなんだ」

「あ、別に気にしないでね？落ちたとかじゃないから」

「え？じゃあ就職とか？」

「うん、そうだよ」

「どこで働いてるの？」

「何でも屋「ドリーム」って知ってる？」

「いや知らない。それに何でも屋？」

初めて聞く名前だ。名前からして何でもしてくれるっぽい所だけど…

「ここから少し離れたところにある店でね、頼まれたことを何でもする何でも屋なの。私含めて従業員は6人。小さい店だよ」

まさかこの時代に何でも屋があるとは…。しかも従業員少ないし…

「じゃあ今日は定休日かなんか？」

「うんそんな感じ」

「どんな事を頼まれたりするの？」

「ん〜？その時によるかな？工事の手伝いだったり製氷だったり色々」

その後やったことあるものを聞いた。他にはベビーシッターや浮気調査、盗まれた物を探したりペットを探したり。本当に色々やるらしい。因みに請け負えない物もあるらしい。何でも屋じゃ無いのかとツッコミたいがあえて何も言わないことにした。

1番きつかったのはベビーシッターらしい。特にミルクあげ。

良く来るのは製氷らしく、どうやら氷系の能力者が居るらしい。

他の人も能力者が聞いたが企業秘密だから言えないらしい。さっき言ってたけどね。

「まあそんなところかな？そう言えば薫の趣味って何？」

「ん？俺？俺は運動にゲームにマンガかな？」

「普通だね」

「そういうリンドは？」

「私？私は少女漫画に恋愛小説、あと節約に裁縫だね。良くぬいぐるみ作ったりするよ。熊さんとか」

「おお凄い。そして以外」

「むっ。何が？」

「女の子ってショッピングが趣味だと思ってた」

「確かにシヨツピングが好きな子はいっぱい居るけど私はあんま買
い物はないな。お金が勿体なくてさ…」

「守銭奴？」

「違う」

からかったら軽くチョップされた。

「いて」

「必要な物しか買わないだけ。使う時は使っけどね」

「へ〜」

ブーブー！ブーブー！

不意に誰かの携帯が鳴った。

「あ、ごめん私だ」

どうやらリンダらしい。電話らしく、席を離れて化粧室に向かっ
ていった。

数分経つとリンダが戻ってきた。

「ごめん、休養が出来ちゃった。先に帰るね」

「ああ分かった」

まあリンダが帰るなら俺も帰るけどね。リンダと話すために居た
わけだし。当初の目的は違っけど。

リンダが帰るのを見送ってから会計を済まして店を出た。

4月12日? (後書き)

お読みになってくださってありがとうございます。

変なところやかしいところがあったら指摘してくださいとありがたいです。感想や質問をどんどん書いてくださって構いません。修正を入れる可能性あるのでご了承ください。それでは次回をお楽しみください

恋愛感情のところは自分の体験談をもとにしています。きっとみんな同じ気持ちだよ、恋してるなら。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1071w/>

SEED

2011年10月2日03時10分発行